ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　ジャックに殺されかけた次の日。

　今、三人の少年の眼前には、どこまでも広がる青い景色が広がっていた。後ろでは、中年位の男性と、少年達と同じくらいの歳の女の子がベンチに座って船を漕いでいた。潮の香りが彼等の鼻腔をくすぐる。眼鏡を掛けた少年が、スっと目を閉じた。

「合宿……だねぇ」

　何やら感慨に耽っているような声を出す彼は相川拓馬。田島道場に住む門下生、つまり内弟子だ。小学二年生で、三人の中では一番背が高い。髪は目にかかるくらいの長さで、まだあどけなさは残っているが、中々に整った容姿をしている。爽やかな人柄も相まって、学年問わず女子からの人気はそれなりに高い。

加えて学校の成績も超優秀で、既に独学で中学レベルの勉強に手をつけている程だ。この間、どこから見つけてきたのか、一之上学校の中等部から一年生の期末試験のテスト問題――当然五教科全部――を持ってきて、道場で解いていた。結果は五百点満点中、三百七十三点。仲間達は勿論、流石の田島辰巳も開いた口が塞がらなかったのは記憶に新しい。

ちなみに本人の目標は四百点だったらしく、割と悔しそうにしていたのだから尚更である。

「ああ、そうだな」

　拓馬の声にのんびりとした口調で答えたのは田島良助。苗字で分かる通り、戸籍上は田島辰巳の息子だ。わざわざ『戸籍上』なんて言葉を使ったのは、彼が田島辰巳の養子だからである。三人の中では拓馬よりモンスターボール半個分くらい背は低いものの、もう一人の少年とあまり大差は無い。良く見ると良助の方が背が高いだろうか。

　眉毛の少し上くらいまで伸びている髪の毛をワシャワシャして、彼は大きく欠伸をする。朝早いせいだろう。

　学校に行っておらず、平日は昼間から修行をしているせいか、最近の彼等三人のポケモンバトルの成績を見ると、若干ではあるが一番勝率が高いのは良助である。この間、最近手に入れたヤナップ一匹で拓馬のタテトプス、ベイリーフ、リーフィアの三匹を圧倒したため、拓馬はショックで一昨日まで食事が喉を通らなくなってしまっていた。

「……」

　無言で海を見つめるのは青柳雅也。三人の中で最年少の彼は、腰のモンスターボールに手を伸ばす。

　今、彼の腰には三つの新しいボールが付いていた。いずれも昨日仲間になったばかりのポケモンである。ボールホルダーにセット出来るボールの数は六個なので、セット出来ない二つのボールは今は足元に置かれている旅行カバンの中に入っていた。

　ジャックとの戦いで負った怪我のほとんどはハピナスに治療してもらったので、パッと見は自分が殺されかけたなんて誰も思わないだろうと確信していた彼だが、やはりというか何というか、新しく三匹のポケモンを連れて帰ったのだから思いっきり不信がられた。

　本当のことを言うわけにはいかなかった。彼と彼のポケモンは、ジャックという壁は自分一人の力で乗り越えたい、という気持ちがあったためでる。何故こんな気持ちがあるのか彼等にも分からない。胸に巣食う『モヤモヤ』は、まだ晴れていなかった。寧ろ、今までより一層ひどくなっていた。

　大学についても雅也達は懸念していた。元の主人が死んで、大学どころの話ではないかもしれないが、雅也達はどうしても、フーディンとハピナスにはちゃんと大学には通って欲しかったのである。

　だが、その心配はすぐに解決した。

　ルカリオという通訳を通したカビゴン曰く、大学の学費については心配しなくていいそうだ。既に今年度分の学費は講座に入っているらしく、フーディンとハピナスは現在大学四年生。カビゴンに至っては六塚の手持ち、というだけで大学生ではないので、そもそもそこら辺を心配する必要は無い。ハピナス達は大学院という所に進学するつもりはなく、このままいけば単位も問題無いので、後は卒業するのを待てばいいそうだ。

　六塚に関してだが、これは少し面倒だ。色々手続きをする必要がある。今が大学も夏休みで良かった。ここら辺は、大学が始まる九月までに何とかしなければならないだろう。

ちなみに『大学には普通に通える』という所を除き、ここまでの話を雅也はほとんど理解していない。しかも小学生にそのような手続きをさせるわけにはいかないので、ルカリオは自分が何とかしなければ、と昨日から頭を悩ませていた。

勿論、カビゴン、ハピナス、フーディンの三匹が仲間になったことについては、ルカリオは何も不満は無いのだが。

「……あ」

　何か音がしたので目を開けた拓馬は、海を切ってこちらに向かってくる小型のクルーザーに気がつき、小さく声を上げた。

「来たな」

「……」

　他の二人も、それに気づく。そして三人は気を引き締めつつも、少し笑顔を見せた。

　後ろで寝ていた二人も、目を覚ます。

　さあ、合宿の始まりだ。